

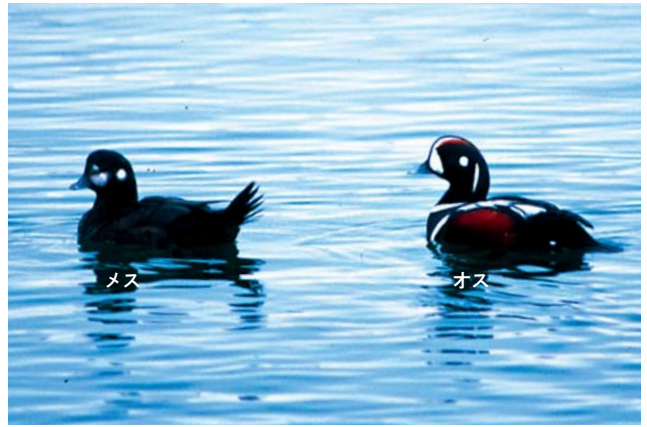
# シノリガモ

*Histrionicus histrionicus*

カモ科・冬鳥(少数越夏・繁殖)

## 名前の由来

「シノリ」は不明。漢字名の「晨(しん)」は夜明けの意。江戸時代中期から「をきのけんてう」として知られ、後期には「しのりがも」と呼ばれたという。「カモ」は「浮かぶ→うかむ→かむ→かも」だとする説、「雁(ガン)→かむ→かも」だとする説がある。漢字名：晨鴨



シノリガモ

## 特定種

国レッドリスト (2007) : 絶滅の恐れのある地域個体群 (東北以北) (LP)

## 形態的特徴

全長 (くちばしの先から尾の先まで) 43cm。体は丸く、くちばしは小さく、尾が比較的長くてとがっている小型のカモ。くちばしも足も青黒色。

オスの頭、背、胸、腹は紫黒色で、顔の前半、目の後方、首の上部、胸側に黒い線で囲まれた線状の白斑がある。脇は赤栗色、尾筒 (尾羽の付け根付近) の上下は黒い。

メスは全体が灰黒褐色で腹の中央がやや淡く、顔に3個の白斑(目先の上下と目の後ろ)がある。

声：冬に海上で泳いでいるときにはほとんど鳴くことはない。ただオスが「フィー」と口笛のような低い声で鳴くという記録があるという。アイスランドでの観察では、夏にオスとメスが「キッキクイー」あるいは「クイーアクイー」というような声を出していたという。

類似種と区別点：メスがクロガモやビロードキンクロのメスと似ている。

クロガモのメスは体が黒褐色で、目より下の顔半分が淡く見える。

ビロードキンクロのメスは大きくてくちばしも長く、その基部は厚い。また顔に淡色斑が2個あり、次列風切(翼後縁の中程の羽)は白い。



シノリガモのオス  
顔の前に大きな白い模様がある。目の後やさらにその後下にも白斑がある



シノリガモのメス  
目先の上・下と目の後に合計3つの白斑がある

## 生息環境・分布

冬は海岸の岩場や崖の多いところ、特に岩礁地で見られる。繁殖地は河川上流で滝と淵の連なる溪流。十勝では冬10～4月に海岸で普通に見られ、春から夏には十勝川、札内川などの上流部で少数見られる。

分布：ユーラシア大陸東部と北アメリカ大陸の高緯度地方に繁殖分布し、冬は幾分南方に渡る。

日本では九州以北に現れるが特に本州北部と北海道に多い。

北海道と本州北部では繁殖も確認されている。北海道では冬鳥。一部は留鳥で繁殖する。海岸や沿岸海上に普通に生息する。

十勝では冬に海岸で普通に見られる。春から夏には十勝川、札内川などの上流部で少数見られ、十勝川水系上流部ではヒナ連れのメスの観察により繁殖が確認されている。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	[Blue bar spanning all months]											
ユーラシア高緯度(越夏・繁殖期)	[Green bar from May to October]											
	越夏・繁殖するものも											
	繁殖											

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ  
ウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原)  
鳥類  
樹林  
タカ

## 食性・他生物との関わり

冬は海で主に貝類、魚、甲殻類、ウニを食べ、繁殖地（河川の上流部）では水生昆虫、藻類などを食べる。  
冬は荒波をかぶるような岩礁地で、水中に潜って採食する。カニを食べるときにはくちばしで捕らえて浮上し、足をくわえて振り回して足をもいだ上で、水面に落ちた胴を拾っ

て飲み込むのだという。

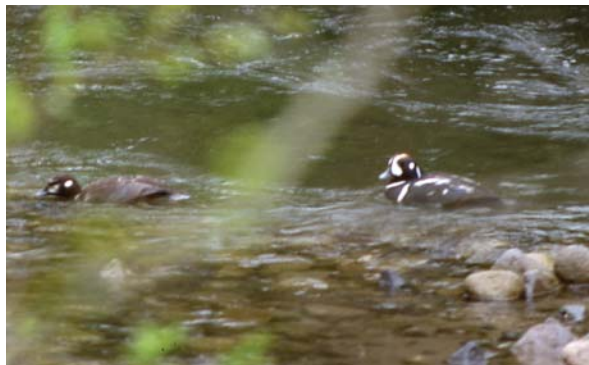
繁殖地では、水中に頭だけ入れて捕ったり、水際の岩についた藻類をこそげ取ったり、水中に5～20秒くらい潜って捕食したりするという。猛禽類などに捕食される。

## 繁殖生態

日本では、北海道（十勝川水系上流部でも）や本州北部で一部繁殖が確認されている。ユーラシア大陸東部と北アメリカ大陸の高緯度地方で繁殖する。

繁殖期は5～7月、一夫一妻。つがいは冬から春にかけてに形成されるので、越冬地で秋から春にかけて、オスの求愛ディスプレイ（興味深い話の項参照）が見られる。巣は溪流からあまり離れない場所にあり、草むらや岩陰、あるいは流路内の小島などの地上に作られる。浅いくぼみに羽毛の内張があるという。巣は充分離れて作られるが、なわばりははっきりせず、オスはメスの周りだけを守っているようだという。

卵は4～8個産まれる。オスは抱卵期の初めに群れとなって繁殖地を去ってしまい、メスのみが卵を抱く。ヒナは28～29日くらいでふ化し、体が乾くとすぐに巣から離れる。ヒナは60～70日くらいで独立する。



十勝で夏に見られたシノリガモのメス(左)とオス(十勝川上流のペンケニコロ川：新得)

## 興味深い話

■非繁殖期には海上で5～30羽ぐらいの群れで見られる。冬から春にかけてつがい形成のディスプレイ（誇示のための行動や動作）が行われる。5～9羽ぐらいのオスが1羽のメスを囲んで鳴きながら体を起こしてはばいたり、短い飛翔を繰り返したりする。また、頭を背の上に跳ね上げたり、くちばしを開いて上の方に向けたり、頭を前方や下の方に投げかけたりもするという。

■上記の他「会釈ディスプレイ」といわれるものがある。頭を水面と平行にし、くちばしを水平にして頭を楕円状に動かすというものだという。

■ヒナが現れる頃になると繁殖に失敗したメスたちが群れ

になり、他のメスのヒナを共同して警戒するようだという。

■宮城県花山村にある栗駒山一迫川（いちほがまがわ）では1973年頃から餌づけられ、毎年4～5月中頃までに3～4つがいが訪れる。5月中・下旬に葉オスがメスを追い回す行動や交尾が見られ、6月中旬になるとオスは群れでいなくなる。そのころふ化したてのヒナを連れたメスが1～2家族現れ、数週間過ごして一旦いなくなる。その後7月下旬にすっかり大きくなったヒナが再び現れるのだという。

■十勝地方のアイヌ語では、カモ類一般（特にマガモ）を「ウォルンチカマ＝水の中にいる鳥」という。

## 配慮事項

主に岩礁のある水域を必要とする。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

佐藤広巳・小湊郁夫 (1988) 栗駒山麓一迫川におけるシノリガモの繁殖とその生態. Strix, 2 : 113-114.

Palmer, R. S. (1976) Handbook of North American Birds, Walterfowl (Part 1 & 2). Yale Univ. Press, New Heaven.

Cramp, S. & K. E. L. Simmons (1977) Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa. Vol. II. Oxford Univ. (eds.) Press, Oxford.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ